

この話とはいうと。偉大で権力がある王がいましたが彼には子どもがいませんでした。彼と妻は長い間子宝に恵まれませんでした。しかしこの妻は王ではありません。妻は王と結婚しただけでその国の一人の女であり、この妻には姉がいました。その姉は貧乏で彼女の夫も貧乏でした。彼らは森に住んでいました。しかし彼らには毎年子どもができました。毎年子どもが生まれるのです。さて、王の妻はその姉に言いました。「いいですか。次に妊娠したら子どもは私にください。」姉は言いました。「いいや、あげられない。もしそれでも欲しいというのなら、ある段取りをするのよ。私が妊娠したらあなたも妊娠した振りをしなさい。私が1カ月だといったら、お前も夫に1カ月だというのさ。そして私が何か必要だったら私は妊娠しているからあれこれが欲しいと夫に言って、それらを私に持ってきなさい。そうすれば私は子どもたちと夫を助けられる。」王の妻は言いました。「わかった。」「じゃあ、子どもを生んだらあなたに渡すわ。」彼女は同意しました。さて、姉は妊娠し夫に言いました。「私は妊娠しました。」そして、王の妻もまた王に言いました。「妊娠しました。」そして王は大変喜びました。彼女が何か欲しいといえはなんであろうとたくさんの物を用意してくれました。そしてそれらは姉の元へ届けられました。王妃はそれらを集めて姉のところへ持っていきました。妊娠した時に人々が供犠をするように彼女もしました。「お金を用意して人々にあげなさい。」人々を喜ばせるためにお金が出され、彼女は姉が使えるようにお金を届けました。彼女は妊娠などしていなく、妊娠のふりをするためにお腹をつくっているだけでした。そして彼女は言いました。「8カ月だしそろそろ森へ移らないといけません。田舎の私の母親のところどうまなければ。」王は言いました。「それでは、よかろう。」王妃はそこへ連れていかれました。山羊やお米、粉類などいろいろな物が、妻が困らないようにと送られました。姉は出産し、王妃もそこにいました。そこに一緒にいました。姉に陣痛で苦しんだ日は彼女もそのふりをしました。召使いたちも連れていかれており、王妃は言いました。「みなのものよ、痛みが来た。」そして彼女は二人とも中に閉じこもろうと言いました。姉は陣痛で苦しみ、苦しんで出産しました。生まれたのです。そして姉は言いました。「いいかい。夫には男の子、女の子どちらが生まれたか言わないように。」「わかったわ。」そして連絡を受け取ると王は大変喜びました。たくさんの物が送られ、さまざまな物が送られました。母子の食べ物などあらゆる物です。翌朝、彼女が起きると姉が言いました。「いいかい。お前は子どもを猫の子どもと同じだと思いかい。私の子どもをよこせと？渡さないよ、私は。」「なんと。私は王になんと言ったらいいのです。それに既に生んだといいました。それに召使いたちは中に入るなと言われているので中には入っていませんが、子どもが泣いているのを聞いています。一体私は王になんと言えよ。」姉は言いました。「そんなことはしらない。お前さんと王が知るのみだね。私は関係ない。」「ひどい。あなたは私に嘘をつかせたのです。」姉は言いました。「渡さないよ。私の子どもだ。生むのは単なる仕事というなら自分でやればいい。」「なんと。」彼女にはなすすべがありませんでした。彼女はそこにとどまり40日が過ぎるのを待ちましたがどうしたらよいかわかりませんでした。彼女の母親は姉を説得しようとしてきました。「お前は姉だ、そして一度同意したのだ。彼女に子どもを渡せば王のところに行き育てられるし、云々。」姉は母親に言いました。「私の子どもは渡さない。」「なんと。なぜなのだ。」そして40日が過ぎてしまい、彼女は王に40日が過ぎるまでは子どもには会えないと言っていました。家に戻ってくるからと。なぜなら彼女は何を王に見せたらいいかわからなかったからです。彼は王のところへ戻り王が自分を殺す日がくればいい、それまでだ、と思いました。さて、王妃の迎えがやってくる日が来て、彼女は夜に連れて帰られました。通りは装飾ながされ町中が王の子どもが連れ

てこられると待っていました。男の子か女の子かどちらの子かは伝えられていませんでした。さて、王妃が車に乗ると彼女の母親は、娘は王のもとで殺されるのかもしれないと泣き続けました。そして後ろの方へいくと大きなひょうたんのような瓜をもらいました。彼女はそれを布や服で何度も巻いて子どものように見せました。そして娘に渡しました。王妃は車に乗りました。「ああ、娘よ。お前があらで殺されるのかもしれない。この子があなたの子どもだよ。」王妃はそれをしっかり抱き、自分も布をかぶり子どものように見せかけて車の中へと入りました。彼らは旅の半分くらいまで来たところで、電灯で光輝く町を見ました。「私は今日王から殺される。いっそ生け贄の鶏の用にしてくれたら。」そして、下に水が流れる橋のところまで来ました。王女は言いました。「みなのもの、ちょっと泊ってください。ここで降りたい。」この子には彼らの霊がついているようなので町に着く前に水で洗ってきます。」運転手は車を止めました。彼女は子どもと降りました。本当の目的は森の中で迷ってしまおうということでした。彼女が下に降り歩き続けていくと子どもの泣く声が聞こえました。水の中からです。彼女がよくみると布で覆われた子どもが入った壺がありました。生まれたばかりの子どもです。へその緒さえ切ってありません。*壺の中に入れておきました。彼女は水の中に降りて行き走って行ってその壺をとりました。彼女はあのひょうたん瓜を壺の中に入れて赤ん坊を抱き抱えました。彼女は赤ん坊と一緒に出てきました。彼女が戻ると上では人々が声をあげていました。「赤ん坊が泣いているでしょう。たった今生んできたところなのです。」女中や召使いたちは急いで降りて、暗い中、へその緒をとり子どもを受け取ってしっかりと包み込みました。王妃は言いました。「私はあの日には生まなかつたのです。あの日は姉が生んだのです。でもこの子は私が生んだのです。」彼らは大変喜びました。男の子でした。彼らは赤ん坊をしっかりと包みこみました。みてごらん、父親そっくりのお顔だ。父親にそっくりのお顔、そっくりの足。男の子だよ。そして、この子が私たちの王となる。彼らは赤ん坊をほめたたえました。王妃は言いました。「おお、ありがとうございます。神は私を救ってくださった。」宮殿に着くと王は大変喜び子どもを受け取りました。赤ん坊が生まれたばかりであることやどうだったのかなど知りませんでした。赤ん坊を受け取ると中に入って座りました。翌日、王妃は召使いたちを送りました。「あそこから母親を連れてくるように。こちらへ引っ越してここで暮らすようにいうのだ。」母親は呼ばれ、彼女は中で泣いていました。彼女は言いました。「きっと娘はもう殺されてしまい今度は私が連れて行かれ殺されるのだ。」「あらで呼ばれています。赤ん坊は元気に泣いていますよ。」「赤ん坊が泣いている？一体どこから来たというのだ、赤ん坊が。」母親は心の中で「赤ん坊が泣いているのかそれとも私は今日殺されるのか？」と問いかけていました。彼らが母親を連れて行き、宮殿の中に着くと彼女は娘と赤ん坊を見ました。娘は母親に言いました。「乳をあげようとするのですが自分で生んでいないので乳なんか出るわけがありません。出ないのです。乳が出るようにこの薬を飲みましたがそれでも出ません。この薬を飲んでも乳は出ないし。」どうにか赤ん坊は育てられました。そしてその赤ん坊は2歳になり、王妃は妊娠しました。次の子どもが生まれました。2年後、また子どもが生まれました。そして2年後にまた子どもが生まれたのです。子どもは3人になりました。拾われた子どもが一番上です。そして王はその子どもを第一子としていました。「この子が私の王位を継承するのだ。」しかし実際には彼の子どもではなかつたのです。さて、ある日王がベランダに座っているともう15歳、16歳にもなる子ども、つまり弟たちが遊んでいました。彼ら3人は軍隊ごっこをしたり、王様ごっこをして、椅子の上に座ってみたりしてあそんでいました。そしてあの一番上の子はキコイを織っていました。キコイを織っているのです。(キコイを知っていますよね。)彼はキコイを織っているのです。木の棒を召使いたちに縛らせてキコイを織って遊んでいました。「しっかり糸をしぼるのだ。こっちを引っ張れ。いいキコイがで

きるぞ。」さて、王は驚きました。そして妻を呼びました。「教えてくれ。この一番上の子は王さまごっこもしなければ戦闘ごっこもしない。彼はキコイを織っているのだ。弟たちは王ごっこをし、国を治める遊びをしている。どういうことだ？今日はこの子たちは一体どうなっているのか本当のことを教えてくれ。一番上の子については、もし私が王の座を退いたら彼にその座を譲るつもりでいるのだ、しかし彼は何をしている。王になることについての興味さえない。「彼になんと言ったらよいのだろう。」妻は言いました。「王、今日は残念なことをお伝えします。この子は私の子でもなければあなたの子でもありません。」彼女は全ての話をしてしましました。姉と話をして姉が同意し、全てのことをしました。しかし最終的に彼女は子どもを私に渡してくれませんでした。そうなのです、私は子どもを水の中にいる子どもを拾って連れてきたのです。壺の中に子どもを見つけたのです。私は子どもを抱いて*。神は私に子を与えようと救ってくれたのです。だからこの子はサテニでキコイを編むのを生業にしているブルシ民族の子なのです。あなたの子ではないのです。もしあなたが財産を与えようとするなら、彼こそ他の子をもたらししてくれた幸運の持ち主です。彼に与えてください。そして彼には住む場所を分けてあげてください。」「不実を行ったお前の姉には罰を与える。お前を殺そうとしたのだからな。この子どもたちとお前は平和にくらしていくのだ。」